

外傷性大網出血の1例

静岡県立中央病院外科(指導: 袴田文治博士)

山 口 雅 崇

〔原稿受付: 昭和34年11月30日〕

A CASE OF HEMORRHAGE OF THE GREATER OMENTUM

by

MASATAKA YAMAGUCHI

Shizuoka Prefectural Central Hospital

〔Director: Dr. BUNJI HAKAMADA〕

19-year-old male was admitted to our clinic complaining of strong abdominal pain. At the time of operation there was hemorrhage of the greater omentum. There was no change found in other abdominal organs or on abdominal wall. Such a case is quite rare among acute abdomen.

結 言

我々は最近少年院(保導施設)に入所中の19才の少年に開腹術の結果、腹壁に外傷がなく、大網出血のみで腹腔内他臓器にも全く損傷のなかった興味ある症例を経験したので報告する。

症 例

患者: 滝○進○, 男, 19才

主訴: 季肋部疼痛

既往歴, 家族歴: 特記すべき事項はない。

現病歴: 昭和33年11月17日, 季肋部疼痛, 嘔吐があり, 翌18日朝から疼痛は程度を増し, 臍部周辺に移動した。少年院診療所で急性虫垂炎の診断を下し, 本院に転送して来た。

現症: 体格, 栄養共に良好, 顔貌軽度蒼白, 苦悶状を呈するが冷汗はない。体温 37.8°C, 脈搏120, 整調, 緊張は稍々弱く, 血圧は最高103mm/Hg, 最低93mm/Hg, 胸部には著変なく, 腹部は一般に平坦, 腹筋緊張著しく, 臍部周辺に圧痛を認める。ブルンベルグ氏徴候を証明し, 白血球数19,000。

以上の所見から急性虫垂炎及びこれに伴って惹起さ

れた急性腹膜炎と診断し, 虫垂切除術を行うことにした。

手術経過並びに所見: 腹直筋屏風切開によつて開腹すると腹腔内から大量の血液が流出するのを認めたので直に点滴輸血を施行し切開を上方に延長して腹腔内を検すると, 腸, 胃, 腸間膜, 肝, 脾等は全く変化なく, 大網に3ヵ所, 小児手拳大乃至鷲鳥卵大の血腫を認め, これを用手的に除去したがなお大網血管から少量の出血があり, 大網には出血以外に癒着, その他の病変は全くなかつた。血腫存在部位附近の血管を結紮処理し, 腹腔内の血液を清拭後, 詳細に腹腔内臓器を検索したが全く異常がなかつたので手術的に水性ペニシリン 10万単位注射し, 腹壁を一次的に縫合閉鎖した。術中強ちに輸血を行なつた結果, 閉腹時患者の全身状態は著しく回復した。

術後経過: 術後経過は極めて良好で翌日には腹痛が去り, 腸雑音聴取, 第4病日自然排便, 食思回復し, 術後第8病日退院した。

考 按

腹腔内出血が, 他に何等の病変なしに起るのは必ず外傷の病歴があるものと考えられたので少年院教師に

執念に問合わせた所、発病2日前、私刑で上腹部を強打され、報復を恐れて減口していたものと判明した。かかる事情がなく、外傷病歴が最初から判明しておれば当然、腹腔内臓器の破裂等が容易に想像される。また以前、同院入所者に急性虫垂炎症状を訴え、開腹術時虫垂正常のものがあつたが術中、患者の告白に“入院すれば自由に煙草が買える”と洩した者があり、特殊環境にあつた患者は問診等に就て特に注意せねばならぬものと痛感した。

腹腔内に出血があり、而も大網のみに損傷があつて他の臓器には全く変化のない例は非常に稀と考えられ、斎藤³⁾氏によれば大網癒着のある場合は時に起り得るというが、本例ではそれもなかつた。報告されている大部分のものは腹部開放性損傷に合併したもので、本例のように腹壁表面に何等所見のないものは未だ1例もなかつた。大網出血の他の場合としては宮川氏¹⁾が特発性腹腔内出血の1例という題で報告しているが、その例では入院患者が十二指腸ゾンデ施行後、大食したため急性腹部症状を発現し、開腹してみると大網の小血管から大出血を来しているのを認めたというのである。同氏はこの出血機序を説明するのに急激大食による血流及び蠕動運動の亢進による大網血管の

破裂であらうとしている。また Låwen は特発性大網出血の原因を大網血管の動脈瘤及び動脈硬化に帰している。

本例は48~72時間前に上腹部打撲をうけて大網小血管の一部破裂を生じ、出血は該部で巨大漿膜下血腫として発展し、ある時期に漿膜が破れて腹腔内に大量の血液が流出したものか、あるいはまた最初から少量の出血が持続していたものかの何れかであろう。

結 語

急性腹部症の極めてまれな症例として、腹部に外傷を受けたが、腹壁及び他の臓器には全く損傷がなくて、大網出血のみであつた手術治験例について述べ、同時に少年院のような特殊環境下にある患者には問診の際、特別の考慮が必要であることの重要性を述べた。

文 献

- 1) 宮川：特発性腹腔内出血の1例。外科，**16**，538，昭29。
- 2) 小野：腹腔内出血を伴える甘藷の過食に因る閉塞性イレウスの1例。臨床外科，**3**，3858，昭23。
- 3) 斎藤：特発性腹腔内出血。日外会誌，**32**，1365，昭6。

興味ある経過をとつた十ヵ月妊婦の急性虫垂炎

静岡県立中央病院外科（指導：袴田文治博士）

山 口 雅 崇 ・ 寺 田 貢

〔原稿受付：昭和34年11月30日〕

A RARE CASE OF ACUTE APPENDICITIS OF PREGNANT WOMAN

by

MASATAKA YAMAGUCHI and MITSUGU TERADA

Shizuoka Prefectural Central Hospital

〔Director : Dr. BUNJI HAKAMADA〕

This report is made on a rare case of acute appendicitis in 35-year-old woman who was 10 month' pregnant.

The operation was performed immediately after admission. On 13th day, she